

【ルーマニア浪漫紀行（1）】

指折りの親日国 到着直後から日本への熱い期待を実感

昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を随時リポートする。



日本からの視察団が宿泊している「グランド・ホテル・コンチネンタル・ブカレスト」＝12日、ルーマニア・ブカレスト（酒生文弥氏撮影）

ルーマニアは現地での発音は「ロムニア」。本来ローマニアと表記されるべき親日国で、歴史とロマンに満ちています。

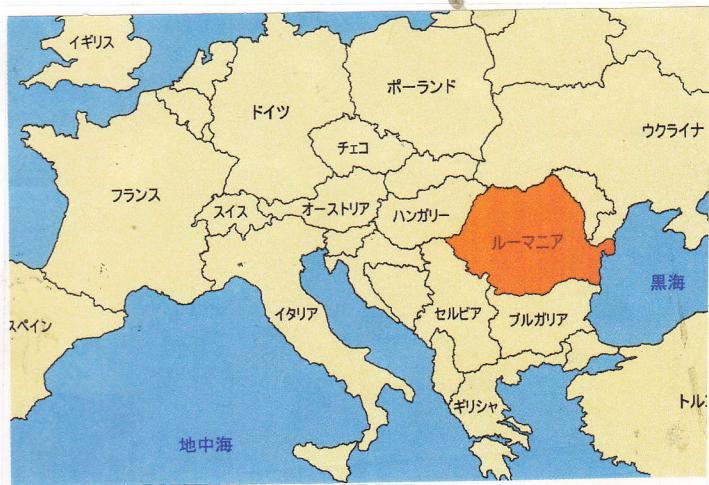
12日、在日本ルーマニア商工会議所のメンバー8人は、小雨に煙る首都ブカレストのアンリ・コアンダ空港に降り立ちました。

ゴシック・ロココ風のグランド・ホテル・コンチネンタル・ブカレストにチェックイン。休む間もなく東欧最大の国営石油化学会社オールキムへの投資要請に4人のビジネスマンが訪ねてきました。

公式日程は13日の輸出入銀行幹部およびルーマニア商工会議所会頭との懇談から始まりますが、欧洲連合（EU）の優等生として活気づくこの国の日本への熱い期待が体感される到着日でした。



アンリ・コアンダ国際空港に到着



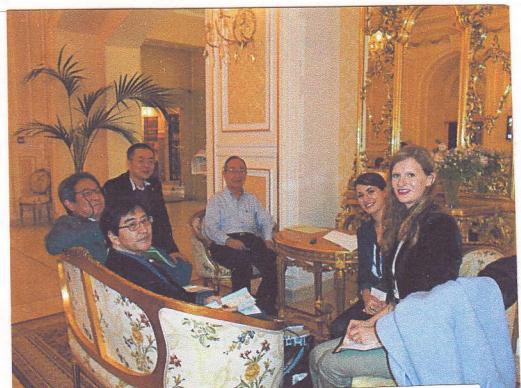
ルーマニアの国土は起伏に富み、本州と四国の半分を合わせたほどの約23万8千平方キロ。豊かな天然資源（石油・天然ガス・金）と沃地（人口約2千万人で8千万人分の有機農作）に恵まれています。2年ぶりに再会した在日本ルーマニア商工会議所のステファン・スタン副会頭（36）の郷里、黒海に望む海都コンスタンツアは、既にオランダのロッテルダムに次ぐEU第2の要港に育っています。

ルーマニアは先の大戦では枢軸国の一員として参戦。ドイツの原油兵站基地としてモスクワ進軍の燃料を賄い、日本とも共に戦った戦友です。スターリングラード敗退後、石油大国としてすぐさま赤軍が蹂躪、人口の1割を殺戮され、しかたなく王様（イギリス王室の近縁・ホーエンツォレルン家）を追放して社会主義国に取り入れられた経緯もあり、チャウシェスク政権崩壊で自由化するまで、地政学的な悲劇を味わった国民でもあります。

革命後、どん底を息抜き、2004年に北大西洋条約機構（NATO）加盟。湾岸戦争で多国籍軍として血で信用を贋い、07年にEU加盟。ギリシャとは対照的な「おしゃん」ぶりで、ようやくローマの伝統と誇りを経済にも発揮しつつあります。

空港名のアンリ・コアンダはルーマニアのエジソンとも言うべき発明家ですが、大戦末期に世界最初のジェットエンジンを発明したことで国際空港にその名を冠されるに至っています。わが国の誇る零式艦上戦闘機（零戦）を開発した堀越二郎技師に勝るとも劣らない航空史の快挙を成し遂げるだけの技術を秘める国でもあるのです。

明日からいよいよ商工業の口マンを追う視察の始まりです。いまから6千年前の昔、ルーマニアが産んだワインを愉しむ晚餐に旅の疲れを癒させていただきます。



ホテルのロビーにて打合せ



ワイン発祥の地ルーマニアの伝統料理

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専門学校代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。

【ルーマニア浪漫紀行（10）】

中東欧最大の石油コンビナート、日本企業への売却を切望

Tweet

(1/4ページ)

オールキム（Oltchim）SA（株式会社）はチャウシェスク元大統領の肝煎りで1966年に建設された中欧・東欧最大の石油化学コンビナートです。現在、その主要施設が売却・譲渡されることになっています。

ルーマニアは日本の大手石油化学企業への売却を切望していて、今月12日に視察団がホテルにチェックインした直後、すぐに企業再生管理会社の3人が迎えに来られました。高速道路を北西に疾駆すること2時間あまり、ヴァルチアにある本社に到着しました。

美しい牧草地が一面に広がるドナウ川支流オルト川の上流域に展開する化学工場、という意味でオールキム社と称します。

途中通過したピテシュティ市郊外に大きな石油精製加工プラント（敷地面積200ヘクタール）を遠望しましたが、本社は石油化学プラントが225ヘクタールとさらに広大なコンビナートでした。

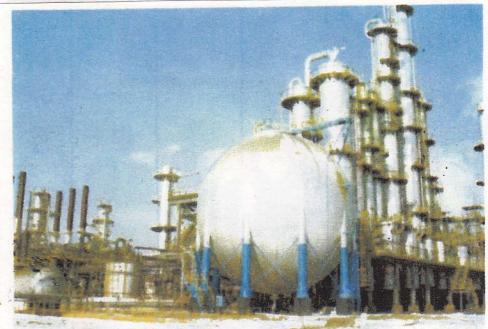
オールキムSA会長代行のアブラム氏や再建管理会社幹部と懇談。1989年年末の革命後も着々と近代化され、中欧・東欧最大の石油化学製品供給者であり続けたようですが、2008年のリーマンショック以降徐々に追い込まれ、ピテシュティは全面閉鎖に追い込まれたとのことです。

オールキムでもう40年も技術主任をして来られた方が車でプラントを案内。主要プラント5基のうち2基（近くもう1基も再稼働見込み）はまだ操業し好調に収益を上げていて、ヴァルチアのコンビナート全体が売却対象資産です。

水酸化ナトリウム生産ライン、塩化ビニール生産ライン、ポリ塩化ビニール（PVC）生産ライン、酸化プロピレン生産ラインなどの内部を視察しました。どのラインも巨大でしたが、完全自動化されていて、それぞれの制御室で数人の専門家によってコントロールされているのが印象的でした。



ルーマニア・ヴァルチアの石油化学企業「オールキム」本社前で記念撮影するアブラム会長代行（左から2人目）と酒生文弥氏（同3人目）



オールキムの広大な石油化学コンビナート群

岩塩と原油という石油化学工業の2大資源が無尽蔵にあるルーマニア。優秀な日本企業が買収して経営にあたれば欧州連合(EU)、中央アジア、トルコ(現在最大の買い手)、アフリカ(アルジェリアなどチャウシェスクはアフリカに多くの友好国を擁していました)といった既存の顧客を活性化し、新規市場も開拓して一大産業として世界市場に再登場できるのではないでしょうか。

オールキムSAは今年4月に企業再建法対象企業に認定され、投資家(買収会社)からの資本注入によってオールキムSPV(SPCと同じ、特別目的会社)へと再編されて、オールキムの名を冠する新企業として再生されることを待望しています。現在の債務はいっさい譲渡されず、環境適合の若干の経費は要するものの、オールキムSA所有の暖簾や本体資産はそのまま譲渡されます。

この一大買収公募にあたっては、入札債権(保証金)が5百万ユーロ(約6億7千5百万円)かかり、最低入札額は3億7百万ユーロ(約415億円)と見込まれています。ご関心の向きは弊商工会議所(roccijapan@gmai.l.com)までお気軽にご連絡ください。

昼下がりになって視察を終えたあと、迎賓施設にておいしいルーマニア料理とワインを頂いて、午後6時過ぎにブカレストに帰着しました。窓から「国民の館」を遠望しながら、「オールキム」こそチャウシェスクの残した真の世界遺産ではないのだろうか、などと思いにふけりました。



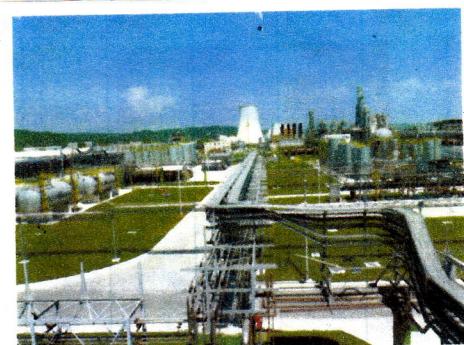
昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を随時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31(1956)年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専門学校代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



アヴァラム会長代行と意気投合



石油化学コンビナート群

【ルーマニア浪漫紀行（11）】

野球そっくりの伝統球技「オイナ」 文化に色濃く残る王家の“遺産”

「オイナ（Oina）」は1370年に競技が行われたと史料に記述されているルーマニアの伝統的な球技です。バットの形もボールの大きさも野球そっくりですが、攻守ともに得点できます。打撃側が「壘」を稼ぐ得点と、捕球側がドッジボール的に打者にヒットする得点があります。

プレーヤーの人数はサッカーと同じ1チーム11人（屋内では6人、ビーチでは8人）と、アメリカで発達した野球とはかなり趣が異なる面も。しかし、イギリスのクリケット同様、野球のルーツとも見なせるようです。オイナは1899年にルーマニアの体育必須授業とされ、1932年に創設されたルーマニア・オイナ連盟は今日まで続いています。

連盟総裁であるニコラエ・ドブレ氏がわざわざブカレスト市内の妻の実家まで来訪され、競技普及への協力要請を受けました。

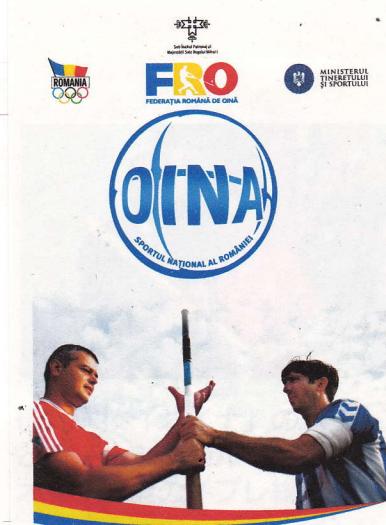
ドブレ総裁は昨年初来日され、栃木県足利市ではじめてオイナと野球の交流をされたそうですが、来年以降2020年東京オリンピックを目指して日本を含む海外への浸透を図っていきたい由。在日本ルーマニア商工会議所として、来春の本格的な来日と多くの交流試合企画をご支援することになりました。

ルーマニアは先の大戦終戦直後まで、ドイツ系の名門ホーエンツォルレレン家を抱く王国でしたが、その末裔に当たる「ミハイ1世」が現在オイナ連盟の有力な後援者になっておられるとのことで、「ミハイ国王杯」もあるようです。

ちなみに、イギリスのチャールズ皇太子はルーマニア王家とは近親であり、トランシルバニア地方に複数の山荘を



伝統球技「オイナ」のバットとボールを持つルーマニア・オイナ連盟のドブレ総裁（左）と酒生文弥氏＝ブカレスト



オイナのプレイボール

所有され、毎年ご静養に来られていることは有名です。私は15年前、西麻布のルーマニア大使館で末裔のおひとりラドウ・ホーエンツォルレルン公とお会いする栄誉に浴しました。その妻で王家直系のマーガレット妃の丁重で流暢な日本語によるごあいさつが今も深く印象に残っていますが、ルーマニアも象徴王制を復古されては、と願う一人です。

先週末訪れた「ドラキュラの城」ことブラン城も、また島津藩からの刀・甲冑を蔵するペリシュ城（元王宮）も、現在は王家末裔の私有財産になっているようです。水面下で象徴王制への復古が進んでいるのかもしれません。

ルーマニアを本格的な「親日国」にすることを究極の使命とする在日本ルーマニア商工会議所です。本日いただいたドブレ総裁との出会いと懇談も、そうした大きな天の計らいのひとつか、と感じています。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。



オイナの競技風景

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



ドブレ総裁からユニフォーム、
バット、ボールをいただく

【ルーマニア浪漫紀行（12）】

「日本と同祖」信じるハンガリー系 武道の道場も訪問

朝8時にルーマニアの首都ブカレストを発ち、ブラショフ、シギショアラを過ぎて一般道を時速100キロで疾走すること5時間あまり。ルーマニアのちょうどおへそ辺りにある美しい古都トゥルグ・ムレシュを訪問しました。現地でグリーン（100%自然で循環型）農牧業を展開し、国際的な武術組織「グランドマスター協会国際連邦（F.I.O.G.A.）」の会長でもあるゾルタン・ベレシュ氏のご招待で、講演と懇親の機会を頂きました。



ルーマニアの古都トゥルグ・ムレシュの市街地（酒生文弥氏撮影）

かつて京都大学に留学し、剣道・居合・柔道・弓道師範であるゾルタン氏は、地域財界を指導する「メンター」的な存在で、実に礼儀正しくも豪放磊落な親日家でした。若い弟子たちが「はい、失礼致します」など日本の敬語を駆使して接待してくれ、ブラショフの武蔵野協会の折と同じく「トランシルバニア・ジャポニスト」とでも呼ぶべき日本への尊敬と期待があふれていて、こちらが照れて恥ずかしくなるほどです。

カステル・ヘラーという、奈良ホテルのような歴史を湛えるホテルに宿泊し、地元経済界の20人あまりの歓待にあざかりました。電気設備、冶金、バリエーと言った基礎産業からICT、コンサル、ベンション経営者など顔ぶれはさまざまでしたが、私の講演を真剣にお聴きいただき、地酒パリンカ（リンゴなどさまざまな果菜を蒸留したもので、焼酎に似ている）とハンガリー風ルーマニア料理で懇親の宵を楽しませていただきました。

トランシルバニアにはハンガリー系、ドイツ系などのルーマニア人（現地では「サシ」と称される）が多く、「ミズ（水）」が「ヴィズ」など日本語に共通の語彙の多いマジャール語が飛び交いました。ハンガリー系の方々は眞面目に日本と同祖であると信じておられ、ひときわ親日であることを実感しました。

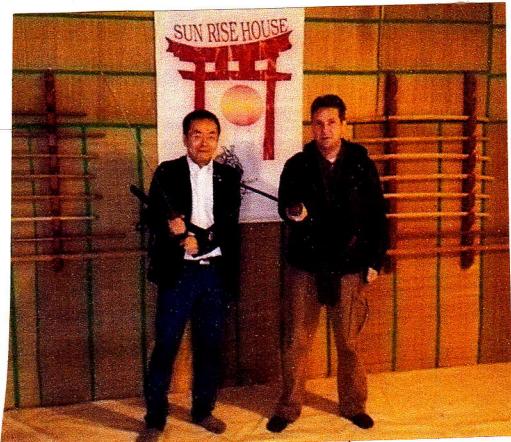


50ヘクタールの理想農園

「サンクチュアリー（聖域）」にて（左からペーター、ゾルタン、酒生、ヨハニスの各氏）

翌朝早く、ゾルタン氏がスイス系環境技術会社「グリーン・プラス」と提携して開発中の、「サンクチュアリー（聖域）」と称する完全自然・循環農牧パイロットファーム（50ヘクタール）を案内していただきました。

広大な牧野と森を擁する用地には「素晴らしいおいしい大気」が満ち満ちていました。個人的にご縁を得ている日本JET社の「ERS（自生バクテリアによるズーコンポスト）システム」をご紹介し、同社が長野で運営する農場との提携・交流などを懇談しました。



ゾルタン・ベレシュ先生の道場にて

その後、市内にある先生の「道場」を訪問。柔剣道・居合・弓道から棒術まで伝授している道場には神棚と仏像もあり、揮毫を求められて拙筆をふるわせていただきました。仏像の前で「天台声明」を唱えたところ、一同望外に感動され、神道と仏教の要諦を熱心に聴いていただきました。地元で栽培されたみごとなユリとバラ、タバコ、パリンカと薬用ワイン、また地域独特の「煙突パン」など土産もたくさんいただきてしまい、惜別に名残つきないトウルグ・ムレシュの一期でした。

読者の皆様に、有機農法や自然農耕に携わる方々がおられましたら、ぜひご一報ください。欧州連合（EU）の農業近代化資金（2020年までにルーマニアに1・8兆円）も活用できそうですし、是非日本・ルーマニア共同で近未来の農業をトランシルバニアから実現させましょう。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後は長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。

【プロフィル】 酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。

【ルーマニア浪漫紀行（13）】

クラブ火災で27人死亡の惨事 首都の治安実態は…

少し肌寒い中にも秋晴れがうれしい首都ブカレスト。人間社会の常として光あるところ影もまた付きまといます。日本大使館によればルーマニアの犯罪発生率は日本の約3倍。凶悪犯はむしろ少なく、窃盗の類がわが国よりかなり多いのですが、語弊をばかからずいえば特定層による生業的な犯罪が多いということであって、繁華街でも体感治安は日本とあまり変わりありません。これはチャウシェスク元大統領のセキュリターテ（秘密警察）を継承する警察組織が強固なことが背景にあります。大きな企業を警備する会社はみなこの警察基盤を活用しています。

10月30日夜、義弟の誕生日を祝ったあと、私は疲れて寝入ってしまいましたが、夜半に救急車とパトカーのけたたましいサイレンの音で目覚めました。帰ってきた妻によればクラブで爆発事故があり大勢が死傷したこと。翌朝のニュースで、死者27人、負傷者100人超と言う大惨事だったことを知りました。



悲しみにくれるブカレストで起きたクラブ火災の犠牲者の関係者（AP）



コレクティヴ・クラブ前キャンドルサービス

老朽化したビルの地階にあるディスコクラブで定員を上回る400人余りがロックのライブに詰めかけ、花火が天井などに引火した後、爆発が起きたとのこと。テレビでは一昨日お会いしたばかりのヨハニス大統領が厳しい表情で追悼の意と責任者の徹底問責を表明し、経営者は逮捕されて懲役25年以上の刑に服するだろうと解説されています。ブカレスト市の管理責任も厳しく追及される見込みで、前市長が汚職逮捕され代わったばかりの現市長も責任は免れないでしょう。

チャウシェスク共産党政権は「おおらかな汚職体制」であったようですが、ルーマニア政財界にはそれが過去四半世紀実質的に受け継がれてきた面があります。浄化を急ぐ現大統領と旧態を継承するポンタ首相。この事件を機に両者の確執とせめぎ合いが深まりそうです。

市内の飲食店は日本の夜の街よりむしろ安心できる明朗会計ですが、使用人酷使や脱税など内部統制はひどいようで、大統領は自治体の権限を越えて今後規制を強化する旨も表明しました。今回の惨事では1982年のホテルニュージャパン火災事件を思い出してしまいましたが、犠牲者の方々のご清福を深く念じ申し上げます。これがブカレストなど都市部に宿るルーマニアの影が薄まる契機になればせめてものご供養では、と感じています。



街中での鎮魂の集い



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が現地の様子を随時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



クラブ火災から汚職政治撲滅全国デモへ

Romanii au decis :

- Demisia guvernului ponta (rezolvat)
- Dizolvarea parlamentului
- Alegeri anticipate
- Modificarea Constitutiei
- Maximum 2 mandate pentru toti alesii
- Unicameral cu 300 de parlamentari
- Punctul 8 de la Timisoara
- Lege a lustratiei
- Pedepsirea criminalilor revolutiei si ai mineriadei
- Confiscarea averilor nejustificate

汚職政治一掃の要求項目

世界遺産の古都シギショアラ 息づくドイツの職人魂

古都トゥルグ・ムレシュから首都ブカレストに戻った夜、家族・友人たちと伝統レストラン、クラマ・ドムネアスカにてパーティーを開き、ロマ・バンドの生演奏に浮かれて疲れを吹き飛ばしました。

私はジプシー・オーケストラ「タラフ・ドウ・ハイドゥークス」の日本公演を聴いて以来、彼らの音楽のファンなのですが、即興でこれほど魂を揺さぶられる楽曲は他に知りません。ハンガリーとともにルーマニアには多くのロマが暮らしていますが、特別な才能を発揮する民だと思います。

翌日は5時間車を飛ばして、午後3時過ぎにトランシルバニア中核の古都シギショアラのホテルに宿泊。今回は創業60年の老舗セラミック大手メーカー、チェシーロ(CESIRO)のラドウ・ポポザCEOのご招待です。まだ若い御曹司のポポザ氏自らのガイドで、シギショアラの丘にそびえるシタデル(城砦)と呼ばれる城壁に囲まれた中世街を散歩。世界遺産「シギショアラ歴史地区」として登録されている市街です。



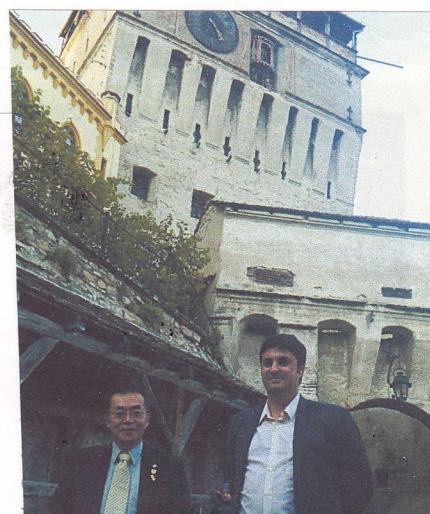
トランシルヴァニアの古都
シギショアラ

ドイツ系が発展させたトランシルバニア地域

林立する塔はそれぞれ、鍛冶師、理容師、冶金工など15もの異なるギルド(同業組合)が競い合い、意匠を凝らして建造したこと。「ジーベン・ブルクス」と総称されるドイツ・ザクセン民族の7大城郭都市の競合でトランシルバニアが開拓された歴史を詳細に教えてもらい、あらためてルーマニアに息づくマイスターシップ(技能制度)の奥深さを知りました。

ワイン、蜂蜜、ファッショントラディション、セラミックなどルーマニアの誇る伝統産業はすべてローマ帝国以前からの文明に起源し、ドイツ伝来のクラフトマンシップ(職人技)により磨かれて今日に至っているのです。

シタデル内には5つ星クラスの名門レストランも軒を連ねていますが、そのひとつで最高のワインとトランシルバニア料理を堪能させて頂きながら、幅広い話題を夜更けまで交わしました。



ラドウ・ポポザ CESIRO 常務と

ドラキュラと織田信長

ドラキュラことブラド公（1431～1476）誕生の館があり、生誕したとされる部屋を見学。ブラド・ツエペシュは捕虜にした2万を超える敵兵（オスマントルコ軍）のみならず規律を破る自軍の兵まで容赦なく「串刺し（ツエペシュ）」の刑に処する鉄の規律で統率し、みごとルーマニアの独立を守った英雄です。

父親フラキア公ブラド2世が「竜騎兵团（ドラクル、つまりドラゴン）」長であったことから「ドラクラ（竜の子供）」とも称されたとのことで、ドラキュラ＝吸血鬼（バンパイア）ではなかったのです。

すぐに連想されるのは日本の織田信長であり、残酷なまでの武断政治で国を統一しようとした点、実に似ていると思います。45歳で部下の裏切りで殺された点も（信長は49歳）。首と胴体を引き離され、頭部はブカレスト、胴体はスナゴフでバラバラに埋葬されたそうです。これは平将門を想起しますね。

オーストリア・ハンガリー帝国からハンガリーが独立を果たした1848年に革命に殉じた詩人ペテーフィ・シャーンドル（1823～1849）の胸像もあり、ハンガリーとドイツの両国がいかにルーマニアの歴史に深く関わってきたかを実感。シギショアラ歴史地区はトランシリバニア史のまさに縮図です。

ナチスがシギショアラ城を司令部にした際、多くのドイツ系の若者が志願してロシア侵攻に帯同したそうで、その多くがシベリア虜囚の憂き目に遭いました。シベリアの強制労働所で日本の軍医渡辺俊男とシギショアラ出身の兵士アナトリエ・アールヒップが交わした友情の実話が、かつてNHKスペシャル「望郷」としてドキュメンタリー・ドラマになっていたことを思い出し、ポーザ氏に話したところ、ぜひその映像資料をと所望されました。あらためて両国語でDVDとして発行していただきたいものです。



ハンガリー独立革命の英雄
詩人シャーンドルの胸像

ロ子

汚職で逮捕されるか汚職の悪弊

城内には博物館のような年代ものの市庁舎もあるのですが、市長・代理市長と相次いで汚職で逮捕され、「2代目の代理市長」が戦々恐々と市政に当たっているとのこと。ブカレスト、コンスタンツアの市長も逮捕されていますが、昨年末当選したドイツ系クラウス・ヨハニス新大統領は、中央・地方を問わず容赦ない汚職摘発を実行していて、市民の快哉を浴びています。ポンタ首相が辞任に追い込まれるのも時間の問題、と語る友人もいます。共産党政権は賄賂が横行する腐敗政権だったのですが、つい最近までその悪弊が引きづられていたのです。

寄宿制の高校もあり、寮の窓々に明かりがともっていました。「ハリー・ポッター」の魔法学校のようなすてきな環境で学べる新しい世代にこそ希望が宿っています。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子をリポートする。

【プロフィル】酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専門学校代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



城砦内にある寄宿制高校



満月に怪しく
聳えるドラキュラの頭像



【ルーマニア浪漫紀行（15）】

ギルド陶工の伝統…老舗セラミック工場に息づく誇り

ルーマニア企業のチェシロ（C E S I R O）は東欧最大の老舗セラミック会社です。古都シギショアラにおけるギルド陶工の伝統を踏まえ、旧ルーマニア王国の輸出産業の基幹として1930年代に近代的な工場群が操業を始めました。

■熟練の腕前、目立つ女性の姿

チャウシェスク元大統領時代も国民の日常用品から、60人の陶工・絵付け師による高級工芸品まで幅広いセラミック製品を内外に供給しました。89年暮れのルーマニア革命を経て民営化。現在は、シギショアラの名門プバーザー族を中心に経営されています。

本社オフィスで幹部と懇談した後、製品博物館を見学。さまざまな意匠を凝らした芸術的な作品群を味わってから、5ヘクタールの敷地に歴史の重みを湛えて展開する工場群を視察しました。

原材料の基礎加工から出荷まで、オートメーションと工員による手作業が見事にかみ合い、さまざまな製品が能率的に生産されていく工場群。工員は女性の姿が多く、みな熟練の腕前であるとのことでした。



ルーマニアの老舗セラミックメーカー「チェシロ」の工場＝シギショアラ（酒生文弥氏撮影）

An advertisement for CESIRO ceramic producer. It features a still life arrangement on a wooden surface. In the foreground, there's a white ceramic bowl containing two slices of melon. To the left, there's a white ceramic pitcher holding orange and yellow flowers, and a small dark bottle. A blue cloth napkin with a cheese wedge and a knife is also visible. The background is dark. On the right side of the advertisement, there's a blue vertical bar with the CESIRO logo and the text "ceramic producer". Below the bar, the slogan "Discover a world of fine ceramics" is written in a smaller font.

2007年に欧州連合(EU)に加盟してからは、西欧諸国へ季節労働に出かける工員も増えたそうで、熟練工を育成・確保していくことが経営課題のひとつようです。ルーマニアの工場はみなそうでしたが、みな明るく誇りを持って働いておられる姿が印象的です。

■来春以降の“開花”目指す

日本や東アジアのセラミック市場は成熟していますから、参入・発展するためには十分なマーケティングが欠かせません。会議所およびイノベーション戦略実践コンサルグループを活用して来春以降、ルーマニアのファッショント業界と併せて総合プロデュースさせていただきます。チェシロ社は有名なジドベイワインや高級蜂蜜も扱っていて、日本での販売も徐々に進めています。

ワイン、蜂蜜などの浸透を土台に、ルーマニアの質実伴う伝統セラミックやファッション、ブランド戦略を明確にして来春の開花を一気にめざしたいと念じています。そのための布石を年内にも始動させるつもりです。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、



ルーマニアの老舗セラミックメーカー「チェシロ」の工場＝シギショアラ（酒生文弥氏撮影）



CESIRO幹部と

同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が現地の様子をリポートする。

【プロフィル】酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専務代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



【ルーマニア浪漫紀行（16）】

農業物産展でヨハニス大統領にあいさつ 汚職追及に市民は喝采

快晴の朝、首都ブカレストの国際展示場「ロメクスピ」で始まったルーマニア農業物産展を視察しました。400を超える農業関連企業・食品会社が出展し、産地直送品を販売する屋台が食欲をそそります。クラウス・ヨハニス大統領、コンスタンティン農水相、ダラバン・ルーマニア商工会議所会頭のリボンカットで開会。3人とごあいさつさせていただきました。



クラウス・ヨハニス大統領
(ロイター)

ヨハニス大統領はまだ就任1年足らずですが、堂々たる体格のドイツ系ルーマニア人で、徹底した汚職追放は市民の快哉を得ています。ダラバン会頭はロメクスピ会長でもあり、チャウシェスク時代を引きずる旧政治利権に近い方です。こころなしかお二人の握手が緊張して見えました。農相には日本から持参したERS（自生菌によるズーコンポストシステム）関連資料を手渡し、短いながら面談。その様子はテレビで報道されたようです。

ルーマニアは人口の4倍にあたる8千万人分の農産物を生産する東欧の一大穀倉地帯を擁します。この有機・自然農業大国と環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）の締結以降、農産物の質が一層問われるであろう日本。両国の農業交流を促進する使命を感じています。

午後は文化・宗教担当副大臣のヴィクトール・オパスキー氏と懇談。ベルサイユ宮殿のような華麗な建物の一室でコーヒーをいただきながら、日本との宗教・文化・教育交流の可能性について懇談。オパスキー氏は老練な政治家で大統領、首相のご意見番だそうですが、私の天職が仏教の僧侶であることを明かすと、とても関心を持っていただき、深い文化談義となりました。



オパスキー文化・宗教担当副大臣と懇談



ダラバン Romexpo 展示センター会長
(ルーマニア商工会議所会頭) と懇談



REMADET (除染システム)
のブース

また視察出発前に在日本ルーマニア商工会議所のルサネスク副会頭が日本に暮らす2千人あまり（家族を含めると4千人あまり）のルーマニア人のための靈園づくりを提案されていましたので、ルーマニア正教の教会など宗教施設充実への支援を要請、快諾いたきました。

私事ですが、一昨年ルーマニア人義妹の日本人伴侶が往生。ルーマニアから派遣されているダニエル神父と私が共同で（正教式と真宗式の組み合わせ）葬儀を執り行いました。一番下の義妹のパートナーがイラン人で、葬儀参列者は日本人、ルーマニア人、イラン人の混成。私は日本語と英語で、「通宗教的」な法話をさせていただきました。

ルーマニアは独自の正教（オーソドックス、つまり東ローマ帝国国教由来のキリスト教）がマジョリティーですが、日本の仏教、神道、武士道への関心は高まりつつあり、今後はお互いの宗教的伝統を踏まえながら相互理解を深めていくことも肝要だと感じています。



INDAGRA 展示ブースにて

昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が現地の様子をリポートする。

【プロフィル】酒生文弥

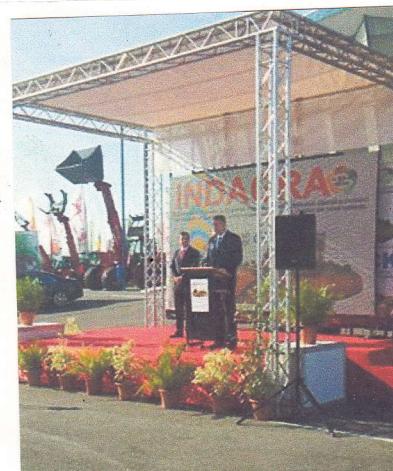
さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。

Romexpo Exhibition Centre

Corporate presentation



Romexpo 展示センター



ヨハニス大統領の INDAGRA 開幕式辞

【ルーマニア浪漫紀行（2）】

貿易にかける強い意気込み 日本の先端技術に現地実業家も関心

視察初日の13日、日本大使館員の先導で午前はルーマニア輸出入銀行、午後はルーマニア商工会議所を訪問し、貴重な懇談の時を重ねました。

輸出入銀行は近くルーマニア開発銀行と名称変更される予定だそうですが、ルーマニアの輸出企業に融資・信用保証・保険サービスを行う政府金融機関です。ルーマニアへの輸出や投資に対してもこの3大業務を提供するよう、

欧州連合（EU）とも連携しながら国家として貿易による繁栄を支える、という新生ルーマニアの強い意気込みを知りました。

輸出入銀行の現在のサービス実績は、EU域内が70%、域外ヨーロッパ諸国が15%、日本を含むその他の地域はまだ15%だそうですが、今後ルーマニアとの商工関係を求める日本企業に力強い味方となることは間違ひありません。私たち在日本ルーマニア商工会議所とは今後協力していくことで合意しました。ご招待いただいたセカレス頭取にあらためて深謝いたします。

旧ルーマニア王国はアフリカとも貿易していた由で、今後日本およびアフリカとの交易促進にも協力を要請されました。

昼食は首都ブカレストの伝統あるレストラン「ヴァトラ・ネアムルイ」へ。おいしいチョルバ（煮込み料理）とシユニツツエル（パン粉のない鳥のから揚げ）に舌鼓を打った後は、午後2時にルーマニア商工会議所を訪問。3時間あまりにわたって懇談・意見交換を行いました。

医療ツーリズムや農業技術交流、大学・姉妹都市提携の促進から、情報通信技術（ICT）交流まで幅広い可能性が具体的に話し合われ、今後密接な提携関係を築いていくことで合意しました。銀行でも会議所でも、予想を上回る歓待を受け、持参したお土産よりたくさんの中のものをいたたき“エビでタイを釣る”思いでした。



Exim Bank にて意見交換



13日、ブカレストで懇談するルーマニア商工会議所と在日本商工会議所のメンバー

ルーマニアを「ローマニア」と表記しなおすことでローマの末裔（まつえい）としてのルーマニアを知ってもらうことにも大賛同いただき、うれしさもひとしおでした。

ビジネスは単純かつ具体的、また楽しみながら行うべし、という在日本ルーマニア商工会議所の江口克彦顧問（参院議員）のご提言、また日本がなぜ戦後急速に復興できたかの説明など、大向こうをうならせる場面もたくさんありました。ミハイ・ダラバン会頭に心より感謝申し上げます。

午後の懇談から老舗レストラン「イシ・エ・ラ」での晩餐会にかけて、日本発最先端技術の次世代がん治療「ホウ素中性子捕捉療法（B N C T）」や、あらゆる機器をインターネットに接続する「モノのインターネット（I o T）」の二つのトピックは大いにルーマニア若手実業家の関心を集めました。「ルーマニアB N C T医療ツーリズム構想」が、今回の視察訪問中にも具体化する可能性が出てきたことは本日最大の成果でした。14日は国会、関係省庁に招かれます。



ダラバン ルーマニア商工会議所会頭
と意気投合する酒生会頭



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



ルーマニア商工会議所幹部と

【ルーマニア浪漫紀行（3）】

「東欧のパリ」面影残る首都 世界で2番目に大きな建築物の中へ… 国會議員や政府高官と熱く議論

14日は多忙を極めながらも実り多い1日でした。朝一番は、来年4月に日本へアンテナショップを出店予定のファッショングループ「ニッサ」（Nissa）のルプ会長と懇談。在日本ルーマニア商工会議所の法人会員であるニッサの進出支援は当面の事業案件のひとつです。ルーマニアのアパレル企業の日本進出に協力いただいている女優、早瀬久美さんのプロフィルや写真などを渡しました。

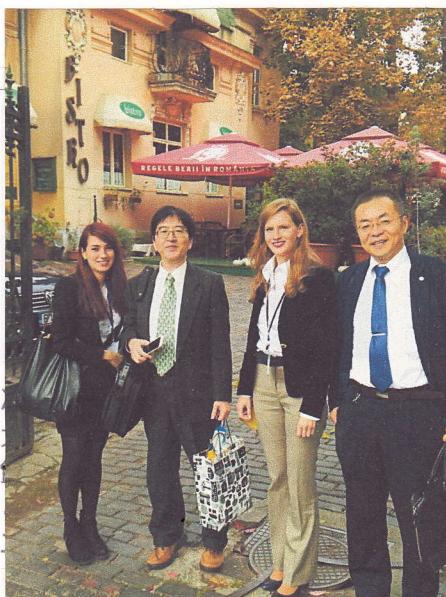


冷戦時代にチャウシェスク元大統領が建造した「国民の館」。現在は国際会議場などとして使われている＝ルーマニアのブカレスト

午前中はルーマニア上院議会を訪問。場所は知る人ぞ知る世界で2番目に大きい建築物である「カサ・デ・ポポルレイ」（国民の館）。ちなみに世界最大は「ペンタゴン（五角形）」と呼ばれる米国防総省の建物です。

国民の館は1200以上とされる会議室を擁する巨大ながらにしてゴシックな宮殿。その中で、ルーマニア日本友好議連オトウレスク会長ら4人の上院議員と懇談しました。首都ブカレストと空港を結ぶ地下鉄の建設、直行便の就航、そして中小企業を主体とするビジネス相互交流と3つの大きな課題を、日本とルーマニア両国が協力してどのように実現していくかが主な議題でした。議連は来年3月末に来日とのこと。また一つお仕事が増えました。

昼はシックなレストラン「クルボル・ディプロマチロル」にてルーマニアの伝統料理を賞味。もとは貴族の邸宅であったそうです。首都ブカレストは国民の館などチャウシェスク元大統領の誇大妄想趣味のために「東欧のパリ」とうたわれた景観が損なわれたといわれますが、なかなかどうしてロマンに満ちた建物や市街が結構残っています。



街角にて

国会議員や政府高官と熱く議論

午後は、ポンタ内閣の直属機関である外国投資・官民連携庁で、アレクサンドル・ナスター長官自ら経済成長の続くルーマニア経済の可能性を熱くかつ明解にレクチャーしていただきました。民間実業家から登用されただけあって、政治家や官僚とは一味違う実践的な講義と意見交換でした。

日本大使館でルーマニアの現状を光と影の両面から解説していただいたあと、最後に経済・貿易・観光省を訪問。武士道を尊敬し自ら空手家でもあるというフローリン・ヴォディツァ次官と日ル両国の伝統的で精神的な絆を踏まえた現実的な経済交流促進を語り合いました。

在日本ルーマニア商工会議所側は、日本の人工衛星の先端性と、情報通信技術（ＩＣＴ）・医療・バイオ・ロボット・再生エネルギーの5大分野での「フューチャー・ショック（近未来の文明激変）」を解説。勃興するモノのインターネット（IoT）産業など、激変する文明システムのコア部品の世界の工場となれば、ローマの末裔が再び世界の中に花咲く可能性を指摘すると、実務経験豊富なフローリン次官も目を輝かせて聞き入っていました。



シックなレストラン



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を随時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。

【ルーマニア浪漫紀行（4）】

ブカレストの国立大学院で「日本との絆」を講演 留学希望者が15人！

15日は公式視察団メンバーのお一人のルーマニア・ブドウの種苗探しと農業技術提携が動き出し、農業分野に関心のある大学教授も同行して現地へと向かいました。この間、在日本ルーマニア商工会議所の江口克彦顧問（参院議員）は、日本大使館員と午前中ブカレスト市内を視察。私は講演会準備に追われる、と言った具合にメンバー各自の活発な動きから始まる4日目でした。

レストラン「ラ・タイファス」にてビネテ（ナスのすり下ろし）、ムサカ（ギリシャ料理）、そして待望のパパナシ（ルーマニアの絶品デザート）をいただいてから、講演会場の国立政治行政学院に向かいました。

輸出入銀行頭取として一昨日お会いしたばかりのヴァシル・セカレス理事長らと懇談のあと、私たち日本人の講師3人は学生200人が待つ講堂へ移動しました。

演題は、江口顧問が「国の繁栄と道徳教育」、末岡武彦事務局長が「イノベーション戦略と実践」、そして私が「ローマとヤマトの絆」。江口顧問は日本語の講演をルーマニア語通訳付きで50分間、末岡事務局長と私は英語でそれぞれ40分間行いました。

講演で江口顧問は「『世界一安全、安心、清潔、正確な国日本』は道徳教育あってこそ。これからますます、そうあらねばならない」と強調。末岡事務局長はイノベーションの真価とそれを発揮するための戦略コンサルティングの理論と実践について解説しました。

私は、ルーマニアと日本の人類史・歴史的な親縁性、宗教俯瞰理論、新たなる連合によって新しい文明を開くべき使命を、それぞれ説きました。ルーマニア語とジョークを交えて久しぶりに大学院生に向けて話しましたが、けっこう受けて拍手してもらったのが何よりの報酬でした。



SNSPA(国立政治行政学院大学)
学長らと、講演前に



講演を熱心に聴講するSNSPAの学生たち

安倍晋三内閣による安保法制成立やフクシマのその後などに関する鋭い質問もあり、江口顧問は集団安全保障の必然性やフクシマの収束に向けた動きなど、参院議員としてしっかり答えました。

また学生15人が日本への留学志望を表明し、日本大使館員が奨学金など留学生応募の要綱を熱心に解説して閉

演。知的に心地よい昼夜がりのキャンパスを堪能できまし
た。

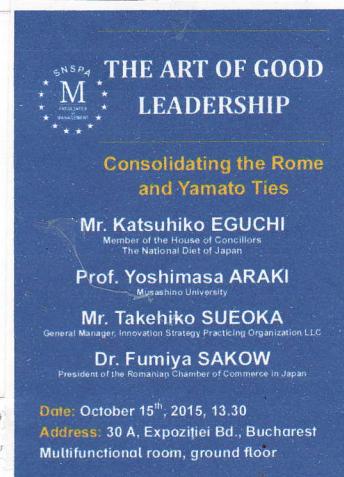
夜、江口顧問と私は保坂英博公使参事官のご招待を受け、ルーマニア料理伝統レストラン・ヴァトラ（彩）にて晚餐懇談会。マラムレシュ地方の民俗舞踏を堪能しながら、サルマーレ（発酵ロールキャベツ）、ミテティ（挽肉）、ママリガ（トウモロコシご飯）、ベルベック（羊肉）などルーマニア料理オンパレードをいただきました。本日2度目のパパナシでしめた充実の1日でした。

まもなく離任される保坂公使の、サウジアラビア西部ジッダにおられた際のエピソードは印象深いものでした。私がプロの通訳としてデビューしたのは33年前、皇太子ご夫妻時代の天皇、皇后両陛下のご成婚記念事業でサウジアラビアに派遣していただいたおりのこと。スカッドミサイルによる突然の空爆は長女誕生直前の出来事でよく覚えています。あらためて親日国づくりによる世界平和への貢献を感じながら、浅からざるご縁をおもう宵でした。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を随時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



各自の演題



「ローマとヤマトの絆」を講演する
酒生会頭

【ルーマニア浪漫紀行（5）】

60年の歴史持つ展示会場を視察 東欧の宿命？“外資の草刈り場”も実感

16日早朝、在日本ルーマニア商工会議所のステファン・スタン副会頭が、情報通信技術（ICT）を専門とするルーマニア人コンサルタントを連れて来訪。あらゆる機器をインターネットに接続する「モノのインターネット（IoT）」関連産業を同国で発展させる構想について懇談しました。



60年以上の歴史を持つ展示会場「ロメクスボ」の前で記念撮影する在日本ルーマニア商工会議所のメンバーら＝16日、ブカレスト

同商工会議所の江口克彦顧問（参院議員）は、今回の視察を通じてルーマニアが（1）基礎技術の水準（人口あたり技術者は日米より多い）（2）賃金の比較優位性（平均月収510ユーロとEU加盟国の下から2番目）（3）仕事量と品質管理を達成できる誠実・勤勉性－の3条件をクリアしていると判断。現在、台湾を中心となっているIoTチップ生産を行えるだけの要件を満たしていると伝えました。

私たちは早速、実現可能性を確認しながらルーマニアにおけるIoT工場設立を目指して動き出すことをコンサルタント氏に約束しました。実現すれば、台湾やミャンマーなどが近い将来、東アジアの半導体市場を塗り替える可能性が高いのと同様に、ルーマニアがEU、CIS諸国および中近東の半導体製品市場を一変させる中枢となりえます。100万ユーロ（約1億3500万円）と概算される初期投資。弊会議所は、われこそはと思われる投資家のノックをお待ちします。

首都ブカレストのレストラン「ゼクセ」でパソレ・バットル（豆のクリーム）、ミティティ（挽肉）、ベルベック（羊肉）、マカロンをいただいた昼食の後、本日のメインイベント会場「ロメクスボ（ローマ展示場）」へと直行。日本の幕張メッセに匹敵する大展示会場で、ミハイ・コストリス理事長らと懇談しました。

ロメクスボは、何と私とほぼ同年齢（60年余り）の伝統を誇る展示会場で、かのチャウシェスク元大統領も産業や新技術の開発発展には熱心に取り組んでいたことが分かり、意外な驚きでした。

私が代表としてあいさつし、記名帳に記名。何か言葉をと求められ「ローマとヤマトの絆をともに深めましょう！」と大書してきました。

その後200余りの展示ブースを、ルーマニア資本企業を重点に視察。残念ながらドイツ、スイス、オランダと言った多国籍企業が多く、東欧諸国の常として革命後の四半世紀でいかに外資の草刈り場となっているかも実感され



Romexpo マスコットと

ました。精密測定機器メーカー「ミツトヨ」など日系企業のブースもあり、担当者から興味深いルーマニア事情を聴くこともできました。

旅程も終盤に向かう今夜は、和食レストラン「ビストロ・カンパイ」にて晚餐。今回公式視察を企画いただいた「G H 3ルーマニア」（浅間亞紀取締役）の粋なはからいです。チャウシェスク元大統領が国家事業として開発した、世界に先駆けるアンチ・エイジング化粧品「ジェロビタール」で有名なG H 3ルーマニアは、創業40年近いルーマニアとの貿易の老舗企業ですが、さすがに同国の見どころ、食べどころを知り尽くしておられます。

17日は、東京都武蔵野市の姉妹都市であるブラショフ市まで足を延ばす予定。日本で言えば京都に相当する中世の町並みを残す古都。私も渡航7年目にしてようやくの訪問で、とても楽しみです。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。

【ルーマニア浪漫紀行（6）】

ドラキュラ伝説のブラン城へ 和服姿の若者たちと交流も

7度目のルーマニア渡航でようやく実現したトランシルバニア地方ブラショフにあるブラン城への訪問。ベテランのガイド、マリアナさんに先史時代から中世、近代に至るルーマニア史を学びながらミニバスで2時間走りました。いまルーマニアがある地域は何とヨーロッパ文明発祥の地であることを知りました。7万7千年前の洞窟画がアパラチア山系から見つかっているのです。

氷河期がまだ欧州の大半を凍らせていた時代、唯一住めたのがドナウ川河口および以南のバルカン半島でした。つまりは現在のルーマニアを中心とする地域が初期の欧洲文明を育んだわけです。ロマニとは「川岸の民」の意味で、欧洲文明の起源であるトラキア（トロイ）族の氏族、ダキア族の別称だったそうです。北方から南下する蛮族のひとつがこの文明にあやかろうと自ら「ローマ」を名乗ったという説があります。

2世紀初頭、ダキアの金を篡奪しに来たトラヤヌス帝がダキアをローマ帝国に併合しました。ロムニアの起源です。ラテン語とはダキアの言語であり、ローマ帝国では支配層のみが話したようです。つまり、ローマニア（ルーマニア）とはドナウ河畔に華咲いた欧州先進文明の末裔であり、ローマ帝国自身よりも古いのです。思いがけない「歴史の発見」でした。

ドラキュラの城として有名なブラン城は13世紀の創建。そのモデルとなったブラド公はシギショアラの出身で、ブラン城には短期間滞在しただけだったようですが、近代のイリアナ王女など800年の歴史を宿すその威容は魅力に満ちたタイムスリップに浸れるひとときでした。

「ウルフレストラン」でサルマーレとチョルバに舌鼓を打った後、ブラショフ市の武蔵野協会に招かれました。東京都武蔵野市とブラショフ市の姉妹都市交流のハブとなる



ドラキュラ伝説で有名なブラン城＝17日、ルーマニア・ブラショフ



ドラキュラの絵画の前で

センターで、日本語と書画、武道、料理など日本文化を熱心に学ぶ100人あまりのルーマニアの若者から熱烈な歓待を受けました。和服姿の美少女たちの日本舞踊モダンバージョンを鑑賞後、手作りのケーキと「ワインの熱かん」でもてなされました。今回の視察に参加した武蔵野大学教授が交換留学など今後の交流促進を約束し、感銘さめやらぬ中、センターを後にしました。

黄昏のブラショフ旧市街をしばし散策してから帰途へ。予想以上に美しいブラショフ市街はベネチアやウィーンにも勝るものがあり、学生にでも戻って長期滞在したいくらいに後ろ髪を引かれました。

いまからホテルに戻り視察団としては最後の晚餐。私自身は月末まで残って実りある浪漫紀行を続けますが、快晴にも恵まれた最高の節目となりました。ただいま、マリアナさんから複雑な近現代史を拝聴しながら、車の揺れも心地よいうたた寝ムードの復路です。



プラン城ベランダにて

昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



博学なガイド、マリアナさん



ブラショフ武蔵野協会にて

【ルーマニア浪漫紀行（7）】

“欧洲一の親日国”目指して…ポンタ首相との懇談も計画

在日本ルーマニア商工会議所視察団の公式事業はあつと
言う間に1週間の日程を消化し、本日18日が最終日で
す。

午前中、ルーマニア駐在のスタン副会頭とセバスティア
ン常務理事を囲んで総括懇談。あらゆる機器をインター
ネットに接続する「モノのインターネット（IoT）」お
よび次世代がん治療「ホウ素中性子捕捉療法（BNC）」を活用したメディカルツー
リズムの実現可能性、インフラ整備および農業近代化への日本の参画、来春に予定され
るルーマニアファッショング日本進出の支援、石油化学プラント経営譲渡の支援など、
今回ご縁を得た両国間のビジネスチャンスを実現していくための基本的な方策を議論し
ました。

視察団はこれからチェックアウトして、名門レストラン「クラマ・ドムネアスカ」にて昼食をいただき、私を除く団員諸氏はその後買い物を楽しんでから、アンリ・コアン
ダ国際空港より日本へと旅立ちます。

私自身は月末まで滞在し、公式訪問として目下副会頭がアレンジしてくれているポン
タ首相および農水大臣との懇談、またいくつかの企業・個人とのビジネス懇談を重ね、
コンスタンツア、ティミショアラなど主要都市への訪問も検討しています。



日本文化を学ぶ現地の若者たちと記念撮影＝17日、ルーマニア・ブラショフ



古都ブラショフの街並み

7万7千年前の太古（20万年前にアフリカで誕生した現生人類ホモ・サピエンスがちょうど『出アフリカ』を果たした時機）にドナウ河畔に人類史上初めてのヨーロッパという文明開化をもたらし、6千年前にはワインを生み出した「浪漫に満ちバッカスの祝福を受けた国ロムニア（ローマニア）」。今後も今回たまわったこの得がたいご縁を紡ぎながら、商工会議所の実務を通じて「ローマとヤマトの絆」を深め、ルーマニアが欧州一の親日国となり、わが国とともに新たなる「坂の上の雲」をめざして先き駆けていくことを深く念じながら、本日をひとつの節目と画します。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。

【プロフィル】 酒生文弥（さこう・ふみや） 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専門学校代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



高山市の姉妹都市シビウ
前市長が現クラウス大統領



ビストロ「カンパイ」にて団最後の晚餐

【ルーマニア浪漫紀行（8）】

ブカレストの路面電車通りを渡って「マック1号店」へ

昼下がり、帰国のために空港に向かう在日本ルーマニア商工会議所の視察団メンバーを旧市街から見送った後、カミル・ラシュ通り第3街にある商工会議所ブカレスト支部に移動。近くの義母家族のアパートで手作り料理のペシュカトーレを楽しみ、義母の補完代替療法（吸い玉施術）に凝りと疲れを癒されて帰宅。朝まで熟睡できました。



ブカレストにあるマクドナルドのルーマニア第1号店（酒生文弥氏撮影）

順調な経済成長を実感

支部があるアパートは10階で市内では高い方です。バルコニーから右手遠方に朝霧に煙る「国民の館」を眺望しました。通勤する人と車でごったがえすトラムバイ（路面電車）の走る大通りを渡ると、マクドナルドのルーマニア第1号店があります。ドライブスルー付設と進化していたこの店で朝マックしました。

支部のアパート1階そばのシシケバブ屋さんも新装・拡大し、リフォームされてきれいになっていた義母のアパートも併せて、ここ数年の順調な経済成長を実感できました。

ただし、「ビッグブレックファスト」が16レイ（約500円）と日本と変わらず、相対的な物価高は、全人口の1割弱190万人を擁するブカレスト市民には悩みの種です。統計上の全国平均給与が510レイ（2万円弱）ですから普通には暮らせませんが、300万人近い出稼ぎ家族（主にEU域内）からの支援がギャップを埋めているわけです。私の家族も、私たちと義妹2人が日本から支えています。日本にいるルーマニア人は現在1900人余りですから、海外生活者としてはまだ少数派です。

ブクル（Bucur）という歴史人物の名に由来するブカレスト（Bucuresti 現地ではブクレシュチと発音します）。Bucurには幸福、estriには「あなたが」の、意味があり、私は勝手に「君に幸あれ」の街と呼んでいます。ラテン民族共通の友人も含む大家族主義はルーマニア人にもひときわ強く、自己主張のはっきりした個人ながらも家族・友人・近隣の相互扶助が息づいている点は、むしろわが国が習うべき面ではないでしょうか。



トランバイ（路面電車）

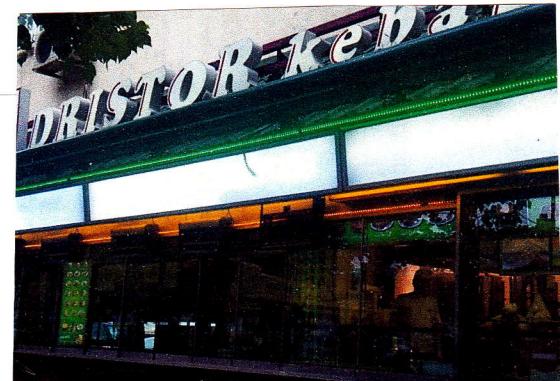
日本の医療技術導入へ懇談

本日午後は、これから健康医療ビジネス大手サニクス社CEOと面談予定。次世代がん治療「ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）」のルーマニアへのいち早い導入の可能性などを懇談するつもりです。私は13年前から「統合医療協会（登記上はまだ旧称・特定非営利活動法人免疫療法懇談会）」と言うNPO活動に携わっていて、主流医療（いわゆる近代西洋医学）にエビデンスある補完代替医療（いわゆる民間療法）を最善の形で統合することを提言し続けてきました。

「統合厚生（Integrative Health）」は、30年前に米カリフォルニア大サンタバーバラ大学院で比較宗教を研究していた折にダライ・ラマ法王の講演を拝聴してからずっと追究してきた「近未来の東西融合」という私のライフテーマの一環です。2日にわたるユーモアに富んだ法王の演題は「西洋の科学と東洋の智慧の幸せな結婚」でした。

空気がうまい！

「空気が実においしい」大都市（？）ブカレスト。この特長はルーマニアが歴史・文化・技術的伝統を湛えながらも、手付かずの自然環境を宿している有機農業大国でもある事実を裏付けています。近年続々と登場しているわが国の優れた「自然・再生可能・持続可能な要素技術」。それらを実業的に開花させうる植民地ならぬ「植“技”地」（あるいは交“技”地）になってもらえるのではないだろうか。私がこの国に想いを寄せる長期的な動機のひとつはその辺りにあります。



ドリストル・ケバブ 1号店



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。視察を続けている酒生文弥会頭が現地の様子を随時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際専門学校代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。

【ルーマニア浪漫紀行（9）】

日本の次世代がん治療導入へ 医療最大手トップと懇談

ルーマニアの健康医療ビジネス大手「サニタス（Federatia Sanitas）」のレオナルド・バラスク会長と、日本が世界に先駆ける次世代がん治療「ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）」を一早くルーマニアに導入する可能性について懇談し、来週にも基本的な具体戦略を練るため会合することになりました。

場所は「国営ルーマニア自由労働組合連合（フラツイア）」本部。バラスク氏はその会長でもあり、日本で言えば連合会長、サニタスとはその国内最大の健康医療事業ブランドで、誰もが知るルーマニア健康医療ビジネスの中核です。

BNCTは、中性子発見以来追究されてきたがん治療法で脳腫瘍・頭頸部腫瘍治療で知られてきましたが、わが国では筑波大・京都大・北海道大がそれぞれ三井・三菱・住友系テクノロジーと提携して対がん汎用化を競っていて、2年ほどで実用化される見込みのハイテクです。

汎用BNCTは、現在最強の（最も正確な）重粒子線の10分の1のコストとサイト（占有スペース）で3倍の効率で治療ができます。すべてのがん細胞を狙い打って破壊する療法で、転移・再発・進行・末期いずれのがんでも完治できる可能性が大いに開ける、という優れものようです。福島県郡山市の総合南東北病院などで医薬申請に向けた臨床試験が着実に進んでいます。

私は、がん免疫療法の啓発NPO（免疫療法懇談会＝統合厚生協会に改称予定）を12年間やって来ましたので、がん三大療法および補完代替医療には精通しています。広義の放射線療法のカテゴリーにある（従来とは一線を画しますが）BNCTは以前から聞き及んでいましたが、今回の在日本ルーマニア商工会議所の視察で江口克彦顧問（参院議員）がルーマニア側に熱心に提言されていました。その流れを受けて、今回の懇談がかないました。



ルーマニアの首都ブカレスト市内の様子。中央付近にあるのがマクドナルドのルーマニア第1号店（酒生文弥氏撮影）



サンニタス会長バラスク氏（右奥）
とBNCT導入を懇談

ルーマニアは、かの有名なアンチエイジング療法ジエロビタールH 3はじめ独自の補完代替医療の宝庫です。前回触れました家庭療法も普及していて、通常医療（西洋医学）と補完代替医療（民間療法）が連なっており、わが国のような極端な「段差」はありません。つまり、グローバルな趨勢である「統合医療（主流医療+エビデンスある補完医療）」を実現していく格好の地とも言えるのです。

医師・歯科医師はこれまで受診経験がありますが、正直言って、医療専門家の個人的技能はわが国のそれを上回るものがあります。スイスやドイツでインターンを経験する医師・歯科医師が多く、個々の患者をしっかり見据えて全人的（ホリスティック）医療を行うクラフトマンシップ（職人技能）に優れているのです。

メディカル・ツーリズムによる共生共栄は、死生観（キリスト教と仏教）の共有も含めて、日ル協業が大いに期待できる商工交流領域であることは間違ひありません。

NPO顧問のおひとり、米国ダートマス大学医学部のローゼン教授は長年ベトナムの無医村でボランティア活動をされてきた方ですが、ベトナムの若き不動産王の支援で東南アジア全域に米国最先端医療の精髓を結集した「メディカル・ビレッジ」を多数展開するビジネスに専心されています。

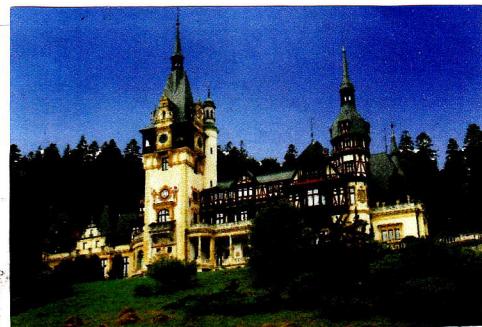
世界の富裕層に周辺施設（住居・不動産）を購入してもらい、近在の貧困層も含めて、無償の医療を提供しようという偉業をミッションとします。わが国も、ルーマニアから同様のミッションを実現できるのではないかでしょうか。そんなビジョンを「坂の上の雲」に、一歩ずつ取り組んでいきます。



昨年、チャウシェスク独裁政権崩壊から四半世紀を迎えた東欧ルーマニア。革命後に長期の混乱を経ながらも近年は堅実な経済成長を続けている。同国と日本の交流促進に取り組む在日本ルーマニア商工会議所の視察団は10月、同国政府などの後援で現地を訪問。酒生文弥会頭が視察の様子を隨時リポートする。

【プロフィル】酒生文弥

さこう・ふみや 昭和31（1956）年、福井生まれ。早稲田大卒、米カリフォルニア大サンタバーバラ校などに留学。酒生国際涉外事務所代表、浄土真宗本願寺派眞照寺住職。妻はルーマニア・ブカレスト出身。



旧ホーエンツォルレルン家の王宮
ペリシュ城（島津家寄贈の甲冑を蔵する）